

一九世紀前期肥後国天草郡高浜村庄屋上田宜珍の家祖調査

—美濃大井の根津甚平と信濃祢津、鷹—

東 昇

はじめに

本稿は、一九世紀前期の肥後国天草郡高浜村庄屋上田宜珍が、どのように家祖について調査し、自家の系図や家意識を形成したか分析する。家祖に関する意識形成の研究として、武家を中心に各身分に応じて蓄積されているが、近世の農民の家意識の形成に関して、山本英二の依田・井尻家の甲斐国浪人の研究がある^②。依田・井尻家は、自家の経営拡大のなかで、偽文書を作成し由緒を語り、幕府の地誌編纂事業を契機に「浪人」身分を獲得していた。公家の家来用人格補任状や東照大権現信仰、武田信玄祭礼などの事例から、「浪人」の権威志向性を分析する。また若尾政希は、「河内屋可正日記」から、清和源氏の壺井姓獲得の動きなどをあきらかにしている^③。これらの研究では、中世末以来同じ地に居住してきた家が、その地の権威を利用しながら由緒形成を行う事例といえる。対して本稿の対象となる上田家は、信濃上田から肥後天草へ移動し、二〇〇年後に家祖調査を行う事例であり、各地を転封する大名・武士の家祖調査と同様の動きとも捉えることが可能である。そのような点から、農民身分が遠隔地を移動した

場合の事例として、分析視角の多角化に貢献できると考える。

家祖調査の主体となる上田宜珍（一七五五—一八二九）は、安永七年（一七七八）高浜村庄屋見習、寛政元年（一七八九）家督相続し上田家七代、庄屋となった。文化二年（一八〇五）天草崩れが発生、異宗信者の調査に中心的に携わり、文化四年大庄屋格、帯刀許可となる。同年疱瘡が発生するが流行拡大を防ぎ、文化五年フエートン号事件に関する「ヲロシア一件」の海岸防備策を実施した。文政元年（一八一八）高浜村庄屋を引退、大江組大庄屋後見役、文政二年から高浜村庄屋後見役、文政四年崎津村庄屋後見役を勤めた。

すでに家祖意識の一端として、同じ本居大平門人の信濃人三枝良古の「天草風土考」「天草嶋鏡」の編纂過程への関わり、歌と旅について分析している。また上田家の祖に関しては、角田政治『上田宜珍伝、附上田家代々の略記』（以下、『上田宜珍伝』と略す）によって、滋野氏一統、初代正信と上田家の濫觴が紹介されている^⑥。

実は上田宜珍の家祖調査については、戦前に上田宜珍の事績とともに初代正信が天草へ来た経緯をまとめた文書に概略が記されている^⑦。家祖について、①美濃長国寺と信濃祢津村四ノ宮大権現へ代参し、両

所の縁起を申し受けた、②漢三和尚の知り合いから真田家へ同姓ということを願い出ようとしたが成就せず、③真田家老根津家妻女筆の彌勒経を漢三和尚から送られ秘蔵している、④熊本藩上田家が同姓であるときとめた、とまとめている。漢三和尚は、宜珍日記に享和三年三月一三日江戸、文化十一年五月二四日、長崎皓台寺漢三和尚へ晋山の祝儀を贈っていることから、旧知の僧であった。⁸⁾この文書の他の箇所にも、上田家歴代の最後が二代上田松彦、そして三代萬平を養嗣子にすることが記されており、昭和初期の『上田宜珍伝』執筆の際の関連資料であった可能性がある。

このように宜珍の家祖調査は四点に集約されているが、いずれも概要であり実態は不明である。そこで本稿では一で②の真田への意識と④、二、三章で①を、史料にもとづきあきらかにしていきたい。なお根津の表記について、根津・祢津・禰津とあり根津を基本に用いるが、信濃の地名は祢津、家名については原本に従い適宜使い分けている。

一同姓熊本藩士上田家と真田家への関心

一 一初代上田正信墓碑と系譜

まず宜珍の家祖に対する意識をみていくにあたり、初代の墓碑銘と系譜を素材に考えていきたい。つぎの初代上田正信墓碑は、文政元年（二八一八）八月、上田宜珍が信濃国社家本居大門人の三枝良古に依頼して作成したものである。⁹⁾

滋野氏者往昔科野国乃宰你叙在氣流、世全乎経弓後你會能家分例低三地仁住、布海野・禰津・望月刀云南利、鹿在天從後禰津之家再分流、居処乃号以上田斗稱一仁波植田刀母書太喇、上田助右門¹⁰⁾門滋埜阿曾美正信者、天正刀云歳乃三歳你阿多流年、水篤苺信濃国上田郷你生留、慶長能五年刀云年、其父左エ門尉正茂登共仁安房守滋野昌幸尔從比弓、紀伊乃高楚能九戸山村尔住利、正信兄弟七人阿理、共尔志慶良俱福島正則刀云者尔与曾利淑理齋丹、同年能号乃十余九年登云尔、左衛門佐滋野幸村刀共尔、難波乃大城你登杼麻流、繼能年彼所乃大城尽仁敗弓軍土等散計奴例婆、其子定正且家乃臣田中清兵衛・清水安左衛門・僧志白等乎召連而、馬乃爪筑紫乃佐岐尔俱垂、肥能道乃後天草郡高濱能邑你家杼古侶標斯波、元和乃三歳刀云年成計理、然四天從三十麻理一年乃後、正保乃四歳登云年霜降月二十日乃日、高濱乃家西弓身罷奴、齡七十余三都故、荒尾山乃麓你葬利称閉拳弓、畔翁宗澤登云（後略）

その内容は、まず滋野氏は信濃の宰であり、後に海野・根津・望月の三家に分かれ、さらに根津から上田（植田）が分かれたとある。つぎに初代助右衛門正信は、天正三年（一五七五）信濃上田郷の生れ、慶長五年（一六〇〇）父左衛門尉正茂とともに真田昌幸に従い九度山へ、その後兄弟七人と福島正則に身を寄せている。慶長十九年真田幸村に従い大坂の陣へ、元和三年（一六一七）家来（田中・清水）・僧志白とともに天草郡高浜へ移住、正保四年（一六四七）七三歳で死去した。後略部分は宜珍の祖先を思う心や家の永続について記す。

つぎに「上田家系譜」をみていくと、表題の下に、「古系並家伝数代肖像、武器馬具及古記録其余文房之具等或欠損各現存」「所蔵之古系可惜入蠹魚之餐故更摹写之」とある。¹⁰⁾古い系図や肖像画、古記録や文房具などを所蔵しており、現存の系図は虫損のため写しを作成したとある。この「上田家系譜」は、『上田宜珍伝』の系図と内容が同じであり、この系譜を利用したものと思われる。¹¹⁾系図には、清和天皇―貞保親王―菊宮―善淵王と続き、善淵王に滋野姓が下賜され、四代後に重道となり、その息子等が海野・根津・望月の三家に分かれる。

正信墓碑と系譜の内容をまとめると、上田家の家祖、系譜は、清和天皇―貞保親王―菊宮―善淵王と続き、六代後の為親に滋氏と蕃隆がおり、蕃隆の系譜に後述する根津惟之がおり、その二二代後に初代正信が位置づけられる。正信は信濃上田郷で出生後、真田昌幸に従い九度山へ行き、一時福島正則を頼るが、真田幸村とともに大坂の陣に参加し、九州へ落ち延び天草高浜へ移住した。

一―二熊本藩士上田家と同姓の交流

一―二―一宜珍の熊本行

つぎに宜珍が同姓と同じ一族と考えていた熊本藩士上田家との交流の実態、上田家の家祖に関する情報をどのように収集したかみていきたい。享和二年五月宜珍は熊本のみ相場調査のため大庄屋長岡五郎左衛門とともに熊本を訪れた。これは天草郡の石代銀の算定基準が長崎と熊本との平均値を採用していたため、熊本相場の平均値高騰の原因究明調査である。¹²⁾この時、熊本では同姓である熊本藩士上田各家と頻

繁に交流している様子が「熊本行日記」から判明する。

五月一三日熊本へ到着し、二四日には、山崎天神側に居住する上田又之丞へ見舞いに行き、土産として樽・千万引・土鍋・水呑・盃を贈り、馳走を受けている。土鍋以下は自家で生産した焼物である。二九日には上田英八が宜珍の旅宿へ見舞いに来た。六月朔日、再び上田又之丞の所へ見舞いに行き、同人知行所の山本郡大清水村庄屋喜平に会い、藩主から羽二重羽織を拝領したことを聞き、同じ庄屋ということを知人になったとある。一三日上田英八が見舞い、一七日夕方、英八とともに山崎居住の上田政之進へ見舞いに行った。一九日上田政之進へ礼、二〇日には上田又之丞より菓子箱と書状が到来した。

そして二二日上田又之丞、同政之進へ暇乞いに行き、英八より文章を一偏、政之進より江戸土産五種が贈られた。この日の夜、政之進を見舞い、同人より聞いた上田家祖の話を宜珍は記録している。熊本藩士の上田家にはつぎの同姓四家があり、各家の当主、石高、先祖名、現住所をまとめる。

①上田弥兵衛 三百石 三郎兵衛末 益城郡越ノ尾村在宅

②上田十蔵 百五十石 名字相分不申候 (益城郡) 糸石村在宅

③上田又之丞 二百石 次男忠右衛門末 山崎天神側

④上田政之進 百石 忠右衛門惣領太郎右衛門末 山崎船場ノ橋口

政之進家については「郷ノ字通り字」と追加情報があった。ここに名前のない英八は又之丞の息子であり、宜珍は熊本滞在中に城下在住の二家と交流していた。この上田又之丞、英八家は、幕末の京都留守居や西南戦争で川尻鎮撫隊を結成する上田久兵衛(休、英八の孫)の

家である。⁽¹³⁾ 上田家一二代松彦は、この同族上田久兵衛に学んだとする。⁽¹⁴⁾ 上田久兵衛家の系図、「先祖附」によると、又之丞は駒井惣次家から養子に入り、儀兵衛から明和六年（一七六九）家督相続する。その後、安永三年（一七七四）熊本七代藩主細川治年の近習、櫛御用掛、鷹御用掛、安永八年には取次役となる。天明五年（一七八五）清記（重賢弟紀休）附役、同八年寅次附役となり、文化二年隠居し、文政六年（一八二二）八八歳で死去する。英八は、先々代儀兵衛の三男、又之丞の義弟にあたり、明和五年生、文化二年に家督相続し、番方、文化九年に時習館訓導となり、文政二年隠居し、嘉永四年（一八五二）八四歳で死去した。上田又之丞家の「親類者縁附」には、隠居上田又之丞、嫡子上田太郎とあることから、英八（休兵衛祖父）が記したものとされる。同姓には上田弥兵衛・上田十蔵・上田政之進とあり、宜珍が「熊本行日記」で、政之進から聞いた内容と同じである。続いて政之進はこの四家の祖先についてつぎのように語っている。

右四軒者中津小倉二而細川氏江相仕候兄弟之末二候之由、元祖忠右衛門ハ名字相分不申候、福馬左衛門太夫ニ暫寄食いたし候由、其後大坂落城後三齋様今千石之鼻紙料ヲ以御召抱候儀被仰付候へ共、私儀老年ニ存候ニ付、悴共差上可申候旨ニ申上候而、右四人御当家今被召出候ト申伝候、且兄弟七人之内右四人御当家へ仕へ、忝人ハ京都西本願寺へ有之、忝人ハ江戸道中筋へ有之由、外ニ忝人行方不知ニも申伝候由、是ハ弥兵衛方ニ而前方今申伝ニ候、此忝人則天草へ御越候御仁共ニ而無之哉、忠右衛門ハ上田主水同姓

ト申伝候、右四人共嶋原陣ニ参候由

上田四家は、中津時代から細川家に仕えた兄弟の子孫であり、元祖は忠右衛門であった。忠右衛門は福島正則の食客として、大坂落城後に細川三齋（忠興）に千石で召し抱えの話があったが、老年のため忝四人が代わって仕えた。弥兵衛家の伝承では、忠右衛門の息子兄弟は元々七人で、四人が細川家、一人が西本願寺、一人が江戸道中筋に居住し、残り一人が行方不明とある。政之進は、この行方不明者が天草に行き宜珍の上田家祖になったのではと推測している。また忠右衛門は、熊本藩士上田主水家とも同姓と伝わり、四家は島原の乱にも参陣したとする。

又之丞家の「先祖附」によると、初代忠左衛門は、「三齋様御代於豊前国被召出、御知行二百石被為拝領、妙解院様御部屋住之節、仲津二而御奉公仕候、当国之御国以後、真源院様御代病死仕候」、二代久兵衛が「有馬御陣之節御供」と、上田四家の伝承とほぼ同じである。⁽¹⁵⁾ このように熊本藩士上田四家の先祖忠左衛門の伝承を受け、正信墓碑には、正信の兄弟が七人いる、一時福島正則のもとにいた、大坂落城後、という内容が確定・付加されていたと考えられる。寛政一〇年六月四日には、宜珍が上田又之丞、政之允両家へ進物を送っていることから、熊本へ行く以前から交流があったことがわかる。

一一二上田弥兵衛家

六年後の文化五年には、宜珍の息子夫婦、順一郎と佐保が熊本へ病

氣治療に向かった。九月二三日には、順一郎夫婦が熊本行の船に乗りそよが付き添ったとある。一月七日、順宝丸が今富の小島から帰帆し佐保が無事帰宅、順一郎は二江から実家の内野へ立ち寄ったとある。この時、順一郎夫婦が持参したと思われる、上田政之進・又之丞・英八の一〇月二七日同日付の書状が三通ある⁽¹⁶⁾。そこには順一郎夫妻の熊本行き、宜珍の大庄屋格拝領への祝辞、土産御礼などが記されている。そして文化六年五月九日には、順一郎夫妻の熊本行の御礼と思われる熊本への音物として、宜珍から上田政之進・又之丞・英八へ、佐保からそれぞれの御内室、御袋、老人衆へ、焼物や煙草、着物等が進呈されている。

宜珍の熊本行の際に会えなかった上田弥兵衛には、文化二年一月晦日、肥後菊池の渋江氏に依頼し「益城郡福原村上田弥兵衛殿方へ、書状并問徳り土鍋遣す、隈府之三池善太夫殿と申仁、上田氏へ懇之由、此仁相頼相達可申との事二候」とある。渋江宇内（一七四三～一八一四）は、肥後国菊池郡の天地元水神社の神職、国学者、名を公正、字は子方、松石という⁽¹⁷⁾。渋江紫陽に学び養子となり、私塾星聚堂で教育、「菊池風土記」「儀礼凡例考纂」執筆した。渋江氏は配札のため九州各地を旅しており宜珍と交流している。

宜珍は、弥兵衛と懇意という、渋江と同郷隈府の三池善太夫を仲介に書状や土産を依頼した。文化三年四月一三日、弥兵衛の書状と扇子箱が、渋江氏の書状と一緒に届いた。その書状は二月一日付、肥後益城郡福原上田弥兵衛貞泰からのものだった⁽¹⁸⁾。内容は、昨年書状を渋江宇内から受け取ったが、渋江宅との距離が遠いので二月三日に

受領したとある。そして「先以先年熊本江御滞留被成候節、同姓両上田江御対話二成、其旨私へも知来候得共、折節無余儀故障有之御滞留中終二熊本迄罷出得申不申、不能対話残念之至二奉存候」とある。先年（享和二年）の宜珍の熊本行に際して、同姓の上田政之進・又之丞との話に自分も誘われたが、故障があり対話できなかったのが残念であると記す。宜珍の熊本来訪にあわせて、熊本藩士上田三家が参会する可能性があったことがわかる。弥兵衛は続けて「先祖之訃等は被仰付候通、是同姓九右衛門致承知居申候、右二付系図二差分り候儀御座候ハバ御知せ申候」とある。宜珍が熊本行の際に政之進から聞いたように、上田家祖について調査するため、弥兵衛は同姓九右衛門にも依頼をして承知しているので、系図などで何かわかれば連絡するとある。

そして天草来訪の際には、上田家へ立ち寄るようにとの宜珍の申し出や、宜珍が贈った焼物の土鍋、徳利の礼も記されていた。四年後の文化七年三月二六日、実際に弥兵衛が見舞いとして上下三人で宜珍を訪ねている。弥兵衛の肩書は「益城郡福原村在宅」とある。弥兵衛一行は、三月朔日に出発し、太宰府に参詣、長崎、雲仙の温泉をめぐり、口津から二江へ渡海、下津深江へ一宿し高浜村へ来村した。翌二七日弥兵衛と一緒に船で舟穿洞、二八日は皿山を案内し、二九日には弥兵衛が帰路山道を通り本戸へ行くというので、途中まで人馬を提供、蓋付茶碗や小服を進呈している。

一―三真田家への関心、真田三代記、藩翰譜

つぎに先述した②松代藩真田家との直接のつながりを示す史料はないが、宜珍の真田家への関心が所蔵書籍に表れている。文化六年三月一五日の宜珍宛洪江字内書状には、「藩翰譜写申候仁漸ク近此二聞出申候、右之書借之申候仁、真田三代記末卷壱冊紛失仕写加へ申度存念ニ御座候間、是は御所持之御本御借し被下候様ニ奉頼上候、随分慥成仁ニ御座候間、私取次申候て少も無間違御返納可仕候、宣敷奉頼上候」とある。⁽¹⁹⁾この返事と思われる五月三日の洪江字内宛宜珍書状には、「藩翰譜写方之儀御世話被下候段忝奉存候、真田三代記末卷壱冊紛失ニ付写加被為成度此方へ所持之本差遣候様被仰聞奉畏候、練兵日記受取ニ被為成御遣候節、一同差上可申候」とある。⁽²⁰⁾つぎに七月三日の宜珍宛洪江字内書状では、前半に熊本藩依頼の「練兵日記」写本の金子送付、後半に「真田三代記」「藩翰譜」について記されている。⁽²¹⁾洪江は天草渡海の節に宜珍所蔵の「真田三代記」の拝借を依頼している。「真田三代記」は、真田昌幸、幸村、幸泰（大助）の真田家三代の興亡を主題とした講談であり、幕末に成立した実録体小説をもとにしており、講談では幸村の奮戦が中心となっている。⁽²²⁾

また「藩翰譜」については、「藩翰譜之儀先達而受合申候者、大部故相断申候、猶又世話仕見可申と奉存候」とあり、写本の引き受け手を探している。「藩翰譜」は、新井白石が甲府藩主徳川綱豊（將軍家宣）の命を受けて元禄一五年（一七〇二）に完成した一三巻の歴史書で、慶長五年（一六〇〇）～延宝八年（一六八〇）の諸大名、諸家三三七家の由来、事績を集録、將軍への貢献度を明らかにし、家ごとの系図

等も掲載される。真田は「藩翰譜」巻九上にあり、「伊豆守滋野信幸ハ信濃国住人海野小太郎幸恒か後とぞ聞えける」と、滋野氏と海野小太郎の末裔と記す。先にみた「熊本行日記」の表紙裏に「藩鑑譜十五冊物之由一部、但写本秘密之至」とあり、「藩翰譜」への関心がうかがえる。これは同姓の熊本藩士上田家、後に時習館訓導となる英八からの情報であった可能性がある。このように宜珍は、熊本藩士上田家と交流し、「真田三代記」などの書籍などから、家祖に関する情報を収集していたといえる。

二美濃大井の根津甚平調査

二―一「根津甚平由来記」の内容

二では上田宜珍の美濃大井における家祖調査について、入手した史料と大井の伝承・史跡に焦点をあてていきたい。上田家には、根津家に関する「柵津系図」「信州柵津城主神平惟之家系図」「信州小縣郡柵津縁起」「根津甚平由来記」「当寺開基信州柵津城主神平惟之家系図」の史料がある。⁽²⁵⁾まず根津家、甚平の事績を記した木版刷の「根津甚平由来記」の全文を掲げる。

ねつ甚平の由来を尋るに、清和天王第四の王子定安親王と申奉り、此若宮御心入邪にて、御父帝御ゑい慮叶わす、信州小縣郡へ遠流し給ひ候間、則ねつといふ所住給ふ内御子三人有、海野太郎ねつ二郎望月三郎とて、是真田家の御先祖也、二男二郎の末にねつ甚

平是行かま倉將軍に使用て、武勇の誉れ多し、其頃ハ後鳥羽院の御宇に、信州き、やうか原に化鳥出て人民をなやめるよし京都へ聞、彼化鳥退治のちよく命、祢津家へ下る、是行畏奉手の者三百余人大鷹数多犬数十疋引連、桔梗か原へはつこう有、変化と申ハ大成雉子也、常の鳥とハ替、羽ハ八重にて剣のこくはしとかつてみにたつ、よつて八重羽のきし共又劍のきし共申伝也、然るに大たかあまたかけ合士卒ハ時の声を上て犬をかけ立、鉦太子を鳴シせめけれハさしもの悪鳥せん方なく、西をきして逃行けれハ跡をしとふて追かけ行、あまたのたか犬も道にてくい合死大鷹一元、犬一匹にてミの国日吉村と云所にて化鳥たか犬共にくひ合死、よつてひよし村氏神是也、甚平も馬諸共大井村にて落命、時に正治二年かのへ申九月廿四日也、ねつの妻いたくなけき大井村へ尋来てなきからをほうむり大成五輪を立、かい名長国寺殿こんしんせきやうこしとのはいを立、同所舟岡山長光寺観音へ詣て曰、わか身ハくわいたい也、願ハ男子多たひして、ねつの家をつかせ給へと一心にせいくわんし通様申て、本国に帰り程なく男子ヲ生、根津の家を立、夫より年々ふせみつきを送し所、天正年中武田四郎勝頼の軍みの国はつこうの時、火をかけ大かたやき払也、其後ねつのみつきハたへたり、然共観音ハ今におはしける也、是をねつの観音共、又孕観音共申れいけんあらたにしてくわいたいの人常に参詣たへすと也、甚平のゐはい馬具、いろいろの道具に長国寺有之

「根津甚平由来記」の最初は、清和天皇第四王子定（貞）保親王、

若宮は信州小縣郡の祢津へ遠流になり、その子三人は海野太郎・根津二郎・望月三郎で真田家の御先祖とある。そして根津二郎の子孫に甚平是行があり、鎌倉將軍に仕えて武勇の誉れが高かった。後鳥羽院の時代、信州桔梗ヶ原に化鳥が出て、人々を悩ませていると京都へ伝わり、化鳥退治の勅命が根津家へ下り、甚平是行は家来三百余人、大鷹数多、犬数十疋を引連れて出発した。化鳥は大きな雉子で羽は劍のようで、八重羽の雉という。甚平は大鷹や犬をけしかけ、家来は時の声をあげ鉦太鼓を鳴らし、化鳥を追い詰めた。その過程で多くの大鷹・犬が化鳥と戦い死んだが、残った大鷹と犬が美濃日吉村で化鳥を倒す。

正治二年（一一〇〇）九月二四日、甚平も馬とともに美濃大井村にて落命した。甚平妻が大井村を訪ね、亡きがらを葬り墓を作り、長国寺殿根津是行居士の位牌を立てた。その後、妻は長光寺観音へ詣で、男子を産んで根津の家を継がせたいと願う。帰国後男子を出産して根津の家を再興、それより毎年寺へ布施を送っていた。

天正年中、武田勝頼の軍が美濃へ侵入した際に火をかけられ、寺は大部分が焼亡する。その後根津の布施は絶えたが、観音は根津の観音、または孕観音と呼ばれ参詣が絶えない。現在、寺には甚平の位牌・馬具他の道具がある、としている。

長国寺は、中山道の旅人が根津甚平のことを尋ねるので、「根津甚平是行由来記」を木版で売っていたとある。²⁶⁾ 上田家の「根津甚平由来記」はその一種であり、長国寺が寺の由緒を広めるための媒体であったとも考えられる。この根津是行（惟之）²⁷⁾が、上田家系譜では家祖となっている。

二二二「稲荷山長国寺縁起」と長国寺

「根津甚平由来記」に関して、文化六年五月三日宜珍宛長国寺住職天輪書状がある。内容は、伊勢参りの途中に長国寺へ参詣されると聞いたが、途中より帰国され代わりに御代香を受納し、それを根津是行居士の追善供養とした。また由来記・系図を所望されたので、写して差し上げる、とある。「根津甚平由来記」「信州祢津城主神平惟之家系図」はこの時に入手したことが判明する。

さて長国寺住職の書状にある伊勢参りは、日記から宜珍養子の順一郎であったことがわかる。文化六年三月一〇日、「順一郎儀、勢州江抜参之由、お小穂（妻佐保）へ書置之一報有之候二付、軍ヶ浦へ兵吉へ彦平差添遣候へ共、出帆後二而空罷帰、其段会所江為御知飛脚差立候也」とあり、五月一七日に順一郎は順幸丸で大坂より帰帆した。抜け参りとあるが、実際は宜珍の指示であったのではないだろうか。

この「稲荷山長国寺縁起」には、禰津の婦人が大井の妊観音に参り小次郎という男子を授かった。その後「信濃州禰津城主侍郎甚平惟之」「禰津小次郎惟清」父子が、桔梗ヶ原の白雉を最初鷹や犬で追いかけたが、神鳥・化鳥と分かり追跡を制止した。しかし鷹匠の一人が追い続け大井で死去し、そして鷹と犬は日吉まで追いかけた。雉・鷹・犬は神明の再化で、里人はたたりを畏れ神社に祀ったとある。甚平は自分の殺生勇武の心を悔やみ名号を念じ、建暦二年（一二二二）春、大井の妊観音に参る。甚平は長国寺栄慶和尚に後事を託し、仏壇の前で合掌して死去、和尚は甚平の希望通り中山道筋の山上に埋葬したとあ

る。「根津甚平由来記」の甚平本人が雉を追ったものとは違った内容である。そして奥書には、「長国寺殿根津是行居士、正治二庚申年九月二四日、年歴至今年六十歳也」とある。正治二年（一二〇〇）は、文化六年（一一八〇）から数えるとちょうど六一〇年目であった。

大井にはいくつかの長国寺の縁起が現存する。本文を確認できた二点、①永禄二年（一五五九）義正「長国寺略縁起書」は「稲荷山長谷寺易地再興之縁起」、②慶長二年（一五九七）體巖雲恕の「長国寺略縁起書」は「稲荷山長国寺復旧地而重建上梁文」とあり、いずれも慶長一九年に写されている。長国寺は永正八年（一五一一）兵火のため焼失し、別の地で長谷寺として再興し、慶長二年旧地に復して長国寺としたとある。⁽²⁹⁾先に成立した永禄二年縁起を上田家「稲荷山長国寺縁起」と比較すると、根津甚平以外の開基、新田氏、行基、西行、井口氏の部分はすべて削除されている。「越先原此観音之所由」や云々、又など改行部分での確に削除されており、当時の長国寺住職が宜珍の要望にあわせて縁起本文を取捨選択して作成したと考えられる。

この「稲荷山長国寺縁起」写は、先述した同姓の熊本藩士へ宜珍が送っていた。文化六年四月八日、宜珍宛洪江宇内書状には「上田政之允方二者江戸帰り二岐岨（木曾・中山道）通申遣候、太守様へ添候役二而御座候へハ、どうぞ岐岨路通相叶候へかしと奉存候」「上田英八へ長国寺之略縁起写遣申候、悦被申候」とある。⁽³⁰⁾宜珍は英八に長国寺の略縁起を送っていたことがわかる。これはまだ「稲荷山長国寺縁起」入手前の話なので「略縁起」とあるように簡略なものと考えられる。また政之允（政之進）は藩主の参勤交代の帰路に際して根津甚平

ゆかりの大井宿を通過する木曾路・中山道の通行を願っているため、すでに根津と上田の關係を知っていたといえる。

宜珍は、八年前の享和元年（一八〇一）六月四日、西国巡礼行の便に依頼し、すでに長国寺へ香典四匁三分を送っている。根津甚平是行の死去は、正治二年九月二四日とされるので六〇〇回忌の香典の可能性もある。いずれにしても、宜珍は文化六年以前から根津氏に関心を持って行動していたことがわかる。

二―三近世の根津甚平伝承と史跡

つぎに根津甚平について、近世の美濃の地誌や紀行文から記述の変遷をたどってみたい。まず最初に確認されるのは、幕臣飯塚正重が明暦元年（一六五五）七月八月に、江戸から大坂へ向かう旅行記「藤波記」である。⁽³¹⁾ 根津甚平についてつぎのように記している。

関坂と云。上りて、左の方に、信州の住人祢津甚平と云人の鷹かひ、八重羽の雉子をとらんとて、爰に至て身まかりけるもの、石塔有。又は祢津甚平の墓ともいへり。かの家の譜を見しに、善測王より七代の孫を祢津左衛門尉道直と云。其子貞直、是を甚平と名付。美濃守宗直、左衛門尉宗道、小次郎敦宗、四世の後、又甚平宗光と云。其子四郎光長、其子又甚平次重綱と云。其後猶甚平と名乗人おほし。いづれの甚平なると聞ど、里人もしらず。坂の上にちいさき原有。石塔原と云。松なみ木有。八重羽の坂下りて、大井駅（後略）

墓所については、根津甚平の鷹匠か本人とされ、「稲荷山長国寺縁起」「根津甚平由来記」の両説を記す。つぎに根津家の系譜を自ら確認し、何代目の甚平か里人に聞いているが不明であった。この飯塚が確認した系図は、後述する根津家関連系図とは代数が相違しており、別系図であったと思われる。⁽³²⁾ そして甚平坂が八重羽の坂と呼ばれていたことがわかる。また信濃望月宿の近くでは「昔八重羽の雉子のありしゆへ八重原と云」とあり、根津氏の本貫地近くで八重羽の雉子伝承が記録される。⁽³³⁾

つぎに福岡藩の儒学者貝原益軒が貞享二年（一六八五）木曾路を旅した際の紀行文『岐蘇路記』である。⁽³⁴⁾ 益軒は、中津川からの道中に「根津の甚平が石塔あり」と簡略に記す。「藤波記」と同じく、信濃望月からの道中では、「又道より根津村みゆる、根津甚平が居たる所也」と根津甚平が二箇所登場する。簡略な記述なので不明であるが、墓所については根津甚平本人の墓としている。

元文三年（一七三八）伊東実臣の美濃国内全域を対象にした最初の地誌「美濃明細記」には、「根津甚平塚 恵那郡大井山道側、信州望月之弟也、甲州武田之家臣にて鷹を追て来り、此所に死す」とある。⁽³⁵⁾ 望月の弟と武田の家臣が追加され、雉ではなく根津甚平本人が鷹を追って大井で死去している。宝暦六年（一七五六）尾張藩士松平秀雲の「濃陽志略」には、「陵墓、禰津神平墓、在駅東路側、里民伝云、禰津神平是行之墓也」と、長国寺妊観音の話がある。ここではじめて是行の名が登場する。寛政年間（一七八九〜一八〇一）尾張藩士樋口好古の「濃州徇行記」は「濃陽志略」の引用である。⁽³⁷⁾

享和二年（一八〇二）幕臣大田南畝が記した「壬戌紀行」三月二八日には、「大井の駅を出て寺坂を上る、（藤波記に、八重羽の坂とあり）、一里塚をへて右のかたにすこし引入て石塔あり、文字なし、これ称津甚平の墓なりといふ」と記される。⁽³⁸⁾飯塚とは逆に大井から中津川へ向かっているが、坂名が寺坂であり「藤波記」と相違していることを指摘する。そして根津甚平の墓を確認しているが、文字がないため根拠がないと考えていた。

文化二年に成立した中山道の名所図会である「木曾名所図会」三には、「根津神平墓」として「大井の東石塔村にあり、甲州武田信玄の家臣なり、鷹を追来りてここに没す」とある。⁽³⁹⁾根津神平本人の墓を示しているが、武田信玄の家臣や鷹を追ってきたなど「美濃明細記」に近い。

天保初〜万延元年（一八三〇〜一八六〇）にかけて古記録を集め編纂した尾張藩士岡田啓の「新撰美濃志」⁽⁴⁰⁾には、長国寺の妊観音と根津甚平墓の記述がある。甚平墓は基本的に「美濃明細記」を継承しているが、根津家は小県郡禰津村を本貫とし代々神平を通称するが、この神平がいつ頃の人物か不明であると「藤波記」と同様の記述である。里人は武田信玄の家士と誤っているが、五輪塔をみると「甚ふるく四五百年以前の墓とみえたり」と記し、石造物から里伝を否定し時代を推定している。その後、「保元物語」「白鷹記」を引用する。

寛政一二年序の松平定信「集古十種」の「兵器馬具」二には、「美濃国大井駅長国寺藏根津是行鐙図」とある。⁽⁴¹⁾この長国寺の馬具は「根津甚平由来記」にも登場しており、鞍・鐙・轡からなり、恵那市指定

文化財となっている。⁽⁴²⁾松平定信は古い馬具であると認識していた。

以上の地誌・道中記の記述から、この大井における八重羽の雉と墓所は、永禄二年成立「稲荷山長国寺縁起」で語られる甚平の鷹匠から、「根津甚平由来記」の甚平本人への変化と同じである。この墓所付近は、天保一三年（一八四二）頃完成した溪斎英泉・歌川広重の浮世絵版画「木曾街道六十九次」の「大井宿」に坂として描かれた。⁽⁴³⁾現在の坂は「甚平坂」と呼ばれこの浮世絵のモデルとされ、付近には犬塚と馬塚、根津神社と墓所が現存する。この墓所は「関戸宝篋印塔」と呼ばれ、高さ二・二四メートルと県内でも最大級で、鎌倉期のものとして岐阜県の指定文化財である。⁽⁴⁴⁾

また根津神社は、明治五年（一八七二）大井村の「村鑑」には記載されていないが、翌明治六年整理、同一〇年頃県庁へ提出した「神社明細調」に大井の字甚平「根津霊社」とあり、板葺、境内八×二四間、祭日九月二四日等が記される。⁽⁴⁵⁾明治初年までに根津甚平の伝承の他、墓所、馬具、神社など、関連資料や史跡が登場している。

二 四明治以降の根津甚平伝承

二 一四 一 根津氏二係ル調査

上田家には、「根津氏二係ル調査」という写本があり、本文中に「本郡大井町」とあることから、恵那郡付近に在住した人物の調査記録と考えられる。⁽⁴⁶⁾また大正九年（一九二〇）刊の太田亮「姓氏家系辞書」から引用しており、この「根津氏二係ル調査」が借用される大正一三年までに調査されたものである。⁽⁴⁷⁾本書には、一根津氏ノ系図、二甚

平塚、三根津氏ト長国寺トノ関係、四神坂古道記ニ録セル根津氏ニ関スル物語、五根津神社、六根津氏ノ末裔の六項目あり、甚平の墓所である甚平塚はつぎのように記される。

本郡大井町ノ東北中仙道旧街道ノ傍ニアリ、同町上宿ヨリ字岡瀬沢ニ至ル所坂路アリ甚平塚ト云フ、此坂ノ中程林野ニ沿ヘル道側ニ苔^(生カ)蒸シタル大ナル五輪ノ塔アリ甚平塚ト称ス、古ヘヨリ地方古蹟ノ一トシテ数ヘラレ兒童走卒モ皆之ヲ知ラザルモノナシ、然レドモ其如何ナル人ナルカヲ知ルモノハ少ナク、唯口碑ニヨリテ八重羽ノ白雉ヲ退治セシ勇士ナリトノ一端ヲ語り伝フルノミ

ここでは坂の名は甚平坂、墓所は甚平塚とし、地域の古蹟として住民は知っているが、どのような人物かは知らず、伝承で八重羽の雉を退治した人物とのみ伝わっているとある。甚平塚と名称は変化した^が、ほぼ近世の地誌類の継承である。つぎに根津神社は明治期の話となり詳しい。

明治一二年 明治天皇中山道御巡幸ノ砌、予メ沿道ノ古蹟其他歴史ニ関スル事項ヲ調査シテ県ニ申報セシコトアリ、甚平塚ノ由来モ亦調査申報セシニ、御巡幸後根津神社ノ神号ヲ下賜セラルルノ御沙汰ニ接シ、爾後大井町ニテハ五輪塔ノ前ニ小ナル石祠ヲ造リ、根津神社トシテ之ヲ祀リ以テ今日ニ至レリ、之ニ由リテ考フレバ根津氏ハ単ニ豪族タルノミナラス、或ハ信濃地方ノ調査ニ依リ勤

王ノ事績顕著ナルモノアリシニアラザル乎

明治一二年の明治天皇巡幸の際に、古蹟として県に報告、その後根津神社の神号を下賜され整備されていく。「根津甚平由来記」と同じく八重羽の雉退治が勅命であったことや、清和天皇に続く根津家として、勤王の事績が強調されている。

最後に「神坂古道記ニ録セル根津氏ニ関スル物語」では、前半は「根津甚平由来記」とほぼ同様の八重羽の白雉退治の話であるが、後半、白雉を土岐郡日吉に追い詰めた後の描写がつぎのように詳しい。

鷹後ヲ追フテ林ニ近ツキ槓ノ大木ニ止リ、四方ヲ睥睨シテ捜シ求ムルモ遂ニ得ズ、久シクシテ大イニ疲レ、槓ノ木ヲ下リ樹下ニ斃ル、其ノ下リシ辺ヲ下リ田ト称シ、槓ノ木ヲ八重羽ノ槓ト称シ、今尚存在シ、現今ノ槓ノ木ヲ三代目ノモノナリトカ、鷹匠犬ナド追ヒ来リ同シク附近ニ斃ル、日吉村ニハ犬石及犬引ノ孫トイヘル百姓アリ、隣村土岐村ニハ犬塚、鷹匠ノ墓ト云ヘル処アリ、甚平モ亦後ヨリ追ヒ来リ、大井町ノ北方ニ於テ力尽キ馬モ人モ共ニ倒レ遂ニ歿ス、甚平塚ハ其ノ遺骸ヲ埋ムル処ナリ云々、信濃ニテハ甚平ヲ神平ト書スルトカ、此物語コソ古ヘヨリ地方ニ伝ハレル甚平塚ノ由来ナレ、蓋シ此白雉ハ強賊ナルベク、以テ勇士ノ片影ヲ語り伝フルモノト謂フベシ

「神坂古道記」の原本は確認できていないが、神坂は古代・中世東

山道の神坂峠を中心とする街道で、街道筋の歴史などを記したものと考えられる。⁽⁴⁸⁾ 大井以外の犬石・犬引ノ孫・犬塚・鷹匠ノ墓の古蹟が確認され、伝承の地理的な広がりが見られる。⁽⁴⁹⁾ また白雉を強賊と位置づけ、甚平の賊退治を物語化したものと解釈している。

また大井の昔話として、「根津甚平の伝説」では、前半に「根津甚平由来記」と同じく、桔梗ヶ原の八重羽の雉を追いかけ大井で死去し、雉も日吉で追い詰め、その後夫人が甚平を追悼し墓を建てた話を掲載する。⁽⁵⁰⁾ 後半に長国寺の永祿二年縁起に記される内容をまとめているので、大井の昔話・伝承としては、史跡や歴史資料に合致する甚平伝承が継承されたと考えられる。

二―四―二 上田萬平と阿部栄之助

上田家の系譜や根津関係の史料が入った袋の上書には「上田知事家古文書」として一一点の文書名が記される。⁽⁵¹⁾ これらは袋に同封される大正一三年（一九二四）六月二五日阿部栄之助の上田萬平宛の「借用証」と同じ内容である（表1）。文末には、昭和五年（一九三〇）二月一五日返却とあり、阿部栄之助が大正一三〇昭和五年の約六年間借用していた。

「上田知事家古文書」とあるように、上田萬平は、上田家一三代当主で、大正一〇年岐阜県知事、大正一三年宮城県知事を歴任し、昭和二年熊本電気株式会社社長となった。⁽⁵²⁾ 岐阜県知事は大正一三年六月二四日まで勤めており、借用は知事辞職の翌日である。阿部栄之助（一八八〇―一九五四）は、長野県小県郡滋野村出身、岐阜県の大正・昭

表1 阿部栄之助借用古文書一覧

番号	表題	上田家番号	年代
1	当寺開基信州祢津城主神平惟之家系図	一六一二三五	
2	祢津系図	一六一二三〇	
3	上田家系譜	一六一二三〇	
4	上田家譜	一六一二三〇	
5	根津甚平由来記	一六一二三四	
6	上田源作様長国寺	一六一二三四	文化六年
7	信州小縣郡祢津村四宮大権現之略縁起	一六一二三五	
8	稲荷山長国寺縁起并御状	一六一二三五	文化六年
9	高浜村焼物山始末書絵図面添		
10	陶磁器ノ発見云々		
11	根津氏二係ル調査	一六一二三四	明治期

参考

未借用	信州祢津城主神平之家系図	一六一二三二	安永七年二月
未借用	信州小縣郡祢津縁起	一六一二三三	安永七年二月
未借用	上田家系譜	一六一二二九	
未借用	上田家系	一六一二三一	

出典：上田家文書一六一二三〇・二三四・二三五袋中文書。参考として当時未借用の関連文書も記載。

和期の郷土史家、教育者であり、東京高等師範学校を卒業後、岐阜師範学校教諭、大正一一年恵那中学校初代校長、昭和四年大垣中学校校長に就任、昭和二四年岐阜大学学芸部講師となる。⁽⁵³⁾ 岐阜県の歴史を調査・研究し、大正一三年『濃飛両国通史』を完成、岐阜県郷土学会会長などを歴任した。

阿部は、古文書借用当時、大正一一年に開校した恵那中学校長であり、加藤護一編『恵那郡史』の校閲を依頼されていたが、中国出張と

重なり十分に責任を果たせなかったとある。⁵⁴⁾ 編者の長島小学校校長加藤護一が郡史の嘱託を受けたのは大正一二年六月と、大正一四年一月の緒言にある。⁵⁵⁾ 『恵那郡史』には、根津神平について、第四編鎌倉時代に「根津神平」の小項目をたて、神平是行については妖観音や大井の甚平塚など「長国寺伝記（縁起か）」の他、「新撰美濃誌」にある「白鷹記」「集古十種」「地名辞書」にある「甲陽軍艦」「源平盛衰記」「諏訪絵詞」を引用している。⁵⁶⁾ その他、口絵には長国寺、根津甚平墓の写真があるが、伝説には収録されていない。

この状況から、阿部は『恵那郡史』の校閲のために、上田萬平知事が大井の根津史料を所持していることを聞き借用したが、中国出張のためか内容を吟味した上でか、十分活用できなかった。そのため『恵那郡史』にはその内容は反映されなかった。また阿部自身が、根津の本貫地に近い小県郡滋野村の出身であることから、当地の歴史研究のため借用していたとも考えられる。

三 信濃祢津と根津甚平

三一 雄右衛門の美濃・信濃行

三では宜珍の家祖関係史料の入手方法、信濃の祢津・四宮権現との関係、根津系図の比較、その後の家祖意識の形成について分析したい。先にみた「根津甚平由来記」「稲荷山長国寺縁起」「当寺開基信州根津城主神平惟之家系図」、長国寺の書状は、同じ包紙で一括される。その内「稲荷山長国寺縁起」の包紙には「文化六己巳年五月、稲荷山長

国寺縁起并御状、代参勇右衛門持参」とあり、「当寺開基信州根津城主神平惟之家系図」の包紙には「文化六己巳年五月、根津家系譜写、濃州恵奈郡大井駅長国寺ヨリ御送、是ハ信州小県郡根津村四宮大権現星合氏分写来り候由、代参勇右衛門」とある。⁵⁷⁾ 以上の史料は、文化六年五月代参した雄右衛門が持ち帰っている。

この雄右衛門の代参は宜珍日記に詳しく、文化六年三月三日雄右衛門の濃州行の船が明日軍浦に到着とある。その船順幸丸は大坂へ向けて出発、上田家の焼物他、榎実やにぶ木を積み込んでいる。三月六日隣村今富村小島の庵主で赤穂へ帰国する鉄翁師と雄右衛門は、乗船のため軍浦へ向かったが延期、出船は一〇日頃となった。その後出発日の記録はないが、六月一五日勇右衛門は、福壽丸に乗り富岡へ着船し、今夕方帰村する予定とあり、ほぼ三ヶ月間の旅であった。

雄右衛門の旅程は、宜珍日記の六月一六日につきのように記される。

雄右衛門此度旅行、大坂今為替金、笹嶋屋平兵衛世話にて水口屋出店ニふり込、尾州名子屋本町水口屋へ取組、美濃国土岐郡土岐口村（美濃国御代官蓑笠之助様御預所之由）之内高山平八方へ滞留調物致ス、去年参候柏屋甚四郎ハ木曾山材木方ニ参候而居合不申候、大井長国寺へ参り墓参、夫今信州善光寺へ参詣、松代通根津村四宮大権現へ参詣致ス

筆者注：（ ）は傍注

雄右衛門は、大坂、名古屋、美濃土岐口村で上田家の商売関連の仕事を行い、その後、大井長国寺、信州善光寺を経由して、根津村の四

宮大権現と、上田家の家祖関係の地を巡っている。この雄右衛門という人物は、享和三年閏一月九日順福丸で薩摩から帰村した船頭雄右衛門、文化三年九月二八日には上田家の皿山の窯口明に雄右衛門を派遣したとあり、上田家の船頭、手代的な存在といえる。その雄右衛門に、商売の旅に加えて大井と祢津の家祖関連の寺社へ代参させていた。

三十二 信濃祢津と四宮権現

雄右衛門が訪れた祢津は、現在東御市祢津にあたり根津家の本貫地である。そこで「信州小縣郡祢津縁起」「信州祢津城主神平之家系図」の二点を入手したと思われる。まず「信州小縣郡祢津縁起」の作者は星合栄智、その後信州祢津大宮神主星合民部とある。内容は、四宮・祢津大権現の由来を述べたもので、最初に四宮大権現は貞保親王を延喜二年(九〇二)に祀り、菊宮の信濃下向、善淵王に滋野姓下賜、広道に三子があり海野・祢津・望月の三家に分かれたと上田家の系譜同様に記す。そして祢津の末裔祢津神平家には、八重羽の雉の古語りがあり、美濃大井宿に石(墓)があるとす。

また四宮大権現は、元和の頃には礎のみ、寛永末年には石宮を造立し祢津権現となった。神主星合利正父子は、古跡である上城・下城・御館中村御馬出シ・裏門前の旧塚や古廟を訪ね、祢津権現の大破を嘆いた。宝永年中、江戸に祢津大権現建立の時、星合父子が公訴したが正徳元年(一七一二)死去した。その後神光が現れ、神前に絹布幟を立てたが破損し再興できなかった。天明三年(一七八三)、山に神光が立ち、三月より六月下旬までにわかに人々が参詣したところで終わ

っている。最終記述年(天明三年)と入手年(文化六年)に二六年の差があるため、栄智の話为民部が記録した可能性がある。

これに近い内容の文書が、長野県立歴史館所蔵の「改正四宮大権現略縁起写」である。天明三年に小県郡祢津大神宮神主星合栄智が記した。⁽⁵⁹⁾内容は、祢津四宮大権現について、まず清和天皇―貞保親王―菊宮と続き仁和四年(八八八)信濃守として下向、延喜二年貞保親王が崩御し、祢津館から戌亥の山頭に葬られ、延長七年(九二九)勅命で四宮大権現となる。菊宮の子善淵王が滋野姓を賜り、信濃国司に任じられ、後の海野・祢津・望月三家の祖となる。正徳元年星合利正は「朕は是四宮権現也、朕が社かくのごとく退廢し、造立せんとする心もなく、朕が山に稲荷社を立て、朕を蔑視すること浅からず」と話し悶絶したとある。その夜から山陵に火の玉が出現したため、急遽黒木の仮殿を建立し、誰触れるともなく四宮大権現降臨として参詣者が群集した。その後再び天明三年三月始めより、その光が一夜に両三度にも及んだ、とある。

上田家「信州小縣郡祢津縁起」と長野県立歴史館「改正四宮大権現略縁起写」は、作者、内容がほぼ同じであり、極めて近い原本からの写本といえる。そして「信州小縣郡祢津縁起」には、祢津神平家と八重羽の雉伝説、大井の墓所と思われる記載がある。

三十三 祢津系図と甚平・鷹

つぎに「信州祢津城主神平惟之家系図」についてみていきたい。系図の奥書には、安永七年(一七七八)二月写、信州小県郡祢津四宮大

の『源平盛衰記』二七「信濃横田川原軍」には、「養和元年六月十四日ノ辰ノ一点也、源氏方ヨリ進ム輩」の内に「根津泰平ガ子息根津次郎貞行、同三郎信貞」とある。⁽⁶⁵⁾

二本松泰子は、禰津を冠する鷹術の流派について、①禰津神平貞直流：室町期の京都諏訪氏、②禰津流：戦国時代～近世期の信州禰津氏、③禰津清頼流：未詳、と整理される。⁽⁶⁶⁾このなかで②禰津流は、松代藩真田家に鷹術をもつて仕えた禰津家に伝来した「禰津志摩守卜有之鷹書」（宮内庁書陵部蔵）があり、そこに先述した永祿二年「長国寺略縁起書」と同じ系統の八重羽の雉伝承があると指摘する。「禰津志摩守卜有之鷹書」の伝承では、仁徳天皇の時代、信濃小県地熊大かけの淵に登場した八重羽の雉を、政頼將軍の仲介で、祢津甚平が雀と鷹と犬の活躍により、美濃国おくい宿町頭で退治する。しかし鷹・犬・祢津も死去し、石塔で祀られたとある。この松代禰津家が「信州祢津城主神平惟之家系図」の「真田伊豆守殿家臣」と思われる。またこの①の貞直は、「滋野氏系図」に「鷹上手」、「信州滋野氏三家系図」に「鷹名誉アリ」と記載される。⁽⁶⁷⁾

そして②禰津流につながる信直は徳川家康に取り立てられ、幕府に諏訪流の鷹術をもたらした中興の祖と位置づけられている。⁽⁶⁸⁾その子信政は、最初武田家に仕え五千石を領していたが、慶長五年（一六〇〇）以前に家康に従属し譜代の家臣となる。慶長七年上野豊岡藩一萬石で立藩したが、二代吉直が寛永三年（一六二六）に没し、無嗣のため二四年で廃絶となった。⁽⁶⁹⁾また二本松氏は、西園寺文庫蔵『西園寺家秘鷹伝』「雑々通用の詞」八七条に、八重羽の雉説話の一種として、河

内交野から遠江小夜の中山まで逃げた鳥を、神平は鷹を置いて待ち構え信濃符郡で捕らえ、その地が八重羽野と呼ばれるようになった話を紹介する。⁽⁷⁰⁾これは先述した「藤波記」と一部同じ内容である。

このように、根津家はいくつかの流れがあり、鷹術に関係し、八重羽の雉を退治する伝承を持つ家であり、大井に伝わる甚平是行につながる部分がある。上田家ははじめに述べたように真田家家老根津家と接触した可能性があり、②禰津流につながると考えられる。しかし禰津家には存在しない甚平是行を祖としており、甚平是行・八重羽の雉退治・美濃国大井（「根津甚平由来記」という別系統の系譜といえるのではなからうか。

上田家では、善淵王の事績は「信州祢津城主神平惟之家系図」から、惟之の没年、戒名は「稲荷山長国寺縁起」を写しており、「上田家系譜」は各種文書を参考に作成している。すでに滋野系図とは相違すると『上田宜珍伝』で指摘しているように、大井に伝承する是行・惟之を家の伝承と接続し、信濃の根津家とは別系統になったと考える。⁽⁷¹⁾

三―四 信濃の三枝良古と宜珍

これまでの宜珍の家祖調査は、その後の家意識の形成に利用されていく。まず幕府が天草郡内の根津氏を調査した記録がある。文化一一年四月一〇日、「根津氏之者当郡中二有無塚田様分御尋二付、当時別苗字ニても已前根津氏ニて有之候ハ、申出候様会所分申来ル」とある。天草郡内に根津氏の者がいないか、長崎代官手代塚田から尋ねられた。現在別の苗字でも以前根津氏の場合は対象であると、富岡会所が付け

加えている。続いて四月一六日「根津氏之沢御尋二付、書付差上候事二付御伺申上候儀有之、申含遣ス」と、根津氏の由来を尋ねられたので、宜珍が書付を提出することについて事前に伺いたいと伝えた。上田家の伝承によると、幕府から天草郡内に滋野姓の有無を調査したが、該当無しと報告したとあり、この根津氏調査の話と似ている。伝承では滋野氏を隠しているが、実際の根津氏調査では、根津氏を表明しており、宜珍の家祖意識のあらわれといえる。

またすでに分析しているが、文政元年（一八一八）の信濃人三枝良古との交流によって、より一層家祖意識が強調されていく。三枝は信濃筑摩郡古井村の杜家で本居大平門人、国学修行のため薩摩に行く途中、同年七月一二日宜珍の所へ立ち寄った。四五日間の長期滞在中、墓碑銘・「天草嶋鏡」序など執筆した。「天草嶋鏡」序には、「此ぬしの遠津祖のあましし国なれはとて、其ちなみにつきて」と、三枝が宜珍の祖滋野・根津氏と同じ信濃出身のため序を依頼したことがわかる。また先述した初代正信の墓碑銘にも、滋野・根津氏を記している。先祖の出身地、同門ならではの依頼といえる。そして文政三年九月には再建した高浜八幡宮の碑文も依頼している。⁽⁷³⁾

宜珍は、同門であり家祖と同じ信濃の三枝に、初代の墓碑や天草の歴史書の序、村の氏神の碑文を依頼し、意識を強調していったと思われる。その後、上田家の墓碑には、宜珍が初代正信に「滋野」、宜珍自身は「本姓滋野」とした後、「滋野定行（一〇代）母」「滋野定珍（一代）」など、滋野氏を刻銘しており定着していくと考えられる。⁽⁷⁴⁾

おわりに

以上、本稿では、一九世紀前期における高浜村庄屋上田宜珍の家祖調査、家意識の形成について分析した。まず一では、上田家の初代正信墓碑、系譜から滋野・根津の子孫という家祖認識を確認し、熊本藩士の同姓上田家との交流と情報収集、書籍による同族真田家への関心をみた。文政元年宜珍が建立した初代正信墓碑には、滋野・根津、真田昌幸・幸村の記述があり、高浜に来住するまでの家祖の流れの大枠は完成したといえる。その家祖について、同姓上田家に伝わる忠右衛門家の七人兄弟の話など、藩士Ⅱ武家上田家をも取り込んで調査は行われていた。

つぎに二では、文化六年の美濃大井における調査を中心に、その際入手した「根津甚平由来記」「稲荷山長国寺縁起」の内容、当時の地誌・紀行文に記載される根津甚平伝承と関連史跡、明治以降の甚平伝承の変遷を追った。大井長国寺を中心に伝わる甚平の八重羽の雉退治のなかに、甚平是行・惟之という、上田家の家祖を発見したといえる。そして甚平は妊観音とともに、長国寺縁起の中心を成し、寺にとっても有効な伝承であった。これらの伝承をもとに、美濃大井では、地誌や紀行文に根津甚平墓を記述し、根津神社、馬塚・犬塚などの周辺史跡が整備されていく。

そして三では、美濃と同時に調査した信濃祇津において入手した「信州小縣郡祇津縁起」、「信州祇津城主神平惟之家系図」の内容、「滋野系図」などの各種根津関係系図の比較、信濃人三枝良古と宜珍の交流

をみた。「信州祢津城主神平惟之家系図」「滋野系図」などでは甚平是行は存在しないが、根津神平は保元の乱などで知られる人物であった。ただ「信州小縣郡祢津縁起」には、八重羽の雉退治や大井との関連をうかがわせる記述、鷹という共通点もあり甚平是行を一概に否定できない。近世以来、甚平・神平両説が美濃大井・信濃祢津に併存していた可能性を示唆している。以上の調査後、宜珍は信濃人三枝良古の訪問によって、初代正信墓碑銘、「天草嶋鏡」序、八幡社碑銘を依頼し、家意識の形成が加速したといえる。その後の上田家歴代の墓碑銘をはじめ、宜珍の自作和歌集「嶋之藻屑」にも滋野宜珍とあるなど、様々な場面で家祖「滋野」が登場していく。

最後に、これら宜珍の家祖調査の背景として、以下、四点を指摘しておきたい。①学問の関心、国学者でもあった宜珍は、天草の歴史書「天草風土考」「天草嶋鏡」を編纂するなかで家の歴史への関心が高まった。「天草嶋鏡」は古代からの歴史を展開するが、宜珍が生きた近世につながる中世以前の歴史のなかで自家の記述はなかった。天草五人衆の改易や天草・島原の乱における、中世以来の土豪層が消えていくなかで、それらに代わる新たな、島外の由緒の形成が必要であったと考える。高い行政手腕により大庄屋格や各村の庄屋後見役を依頼される宜珍は、その格に見合う家祖の確定をしたといえる。

それは一方で②村と家の安定にもつながっていく。美濃・信濃を調査した文化六年は、文化二年天草崩れ、文化四～五年疱瘡流行、文化五～六年のヲロシア一件などの村の不安定要素が増大した直後である。そのなかで、宜珍は村と家の安定を願い家祖の菩提を弔う長国寺・

四宮権現への代参を行い、それが家祖をみつめ直す契機となったのではないだろうか。

特に③ヲロシア一件への対応は、村の防衛、自らの武を意識する側面があった。一九世紀初期、ロシアなどの対外脅威は、文化元年ロシアのレザノフ来航、文化三、四年ロシア船の蝦夷地襲撃事件による文化五年島原藩・熊本藩の海防調査、同年八月フエートン号事件によって膨張していく。地理的に島原・熊本から遠い高浜では自主防衛を余儀なくされ、宜珍は明の軍学書「練兵日記」を利用し、村民の一一四五人を動員する対策を講じていた。⁽⁷⁵⁾そのような対策は、行政能力の高さでもあったが、一方で滋野・根津の末裔、真田とともに活躍したという自家の武の側面を意識した行動でもあったと考えられる。

また④家の安定には、享和二年娘佐保に婿順一郎を養子として迎えた事情もあった。高浜上田家歴代ではじめての養子当主となる順一郎に対して、宜珍は自身が家の歴史をまとめ伝えていく役割を自覚したと思われる。同年の熊本における同姓熊本藩士との交流も、この養子が契機となった可能性もある。

このように、宜珍の家祖調査の理由として四点を提示できるが、系図の詳細な分析や、宜珍前後の上田家における家意識の解明など課題は残る。しかし農民層の由緒形成には、庄屋という視点からみていくと、村の事件や対外関係とつながり、家の当主・個人に視点を移すと家の継承、学者としての意識などが存在し、多様な背景を分析する必要があるといえる。

追記 史料の閲覧に際して上田陶石合資会社、岩下邦明所長、田中光徳氏には御高配を賜った。また上田休兵衛・典籍に関して米谷隆史氏に貴重な情報をご教示いただいた。そして根津と鷹術については、中澤克昭氏に重要な指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。なお本稿は二〇一六年度、JSPS KAKENHI16H01946（基盤研究（A））「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する総合的研究」（研究代表者福田千鶴）の研究成果の一部である。

（二〇一六年十月三日受理）

（ひがし のぼる 文学部歴史学科准教授）

- (1) これまで武家の祖に関して、対馬藩宗家を事例に、中世以来家祖は平知盛であったが、近世後期安徳天皇へと変化し、明治期に陵墓認定運動につながった経緯をまとめている（東昇「明治期における対馬の安徳天皇陵墓認定運動」『長崎県文化財調査報告書二〇一九 対馬宗家文庫史料絵図類等目録』、二〇一二年、三六七～三七七頁。同「対馬・宗家と安徳天皇陵―「宗家文庫」の新資料―」交隣舎ブックレット一、二〇一四年）。
- (2) 山本英二「甲斐国「浪人」の意識と行動」『歴史学研究』六一三、一九九〇年、一二〇～一三〇頁。
- (3) 若尾政希「近世における「日本」意識の形成」若尾政希・菊池勇夫編『「江戸」の人と身分五 覚醒する地域意識』吉川弘文館、二〇一〇年、一五～四五頁。

- (4) 東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり」『近世の村と地域情報』吉川弘文館、二〇一六年、二〇六～二四一頁。
- (5) 東昇「近世後期肥後国天草郡における庄屋をめぐる書籍の貸借と学問・行政」『京都府立大学学術報告（人文）』六七、二〇一五年、一七～一三二頁。
- (6) 角田政治『上田宜珍伝 附上田家代々の略記』一九四〇年、一～七頁。
- (7) 上田家文書、無番号文書であり、上田家文書一六一・二三〇・二三四・二三五の袋中にある。上田家文書は、庄屋家の子孫にあたる上田陶石合資会社（熊本県天草市）が所蔵する。なお文書目録は天草町教育委員会編『天草町上田家文書目録』（一九九六年）がある。以下上田家文書を引用する場合には文書番号を記す。
- (8) 『天草郡高浜村庄屋 上田宜珍日記』寛政五～文化一五年、全二〇巻、天草町教育委員会、一九八五～一九九八年。なお本文中に記載のない年月日付史料の出典については、上田宜珍日記であり、各年の該当月日を参照いただきたい。
- (9) 『上田宜珍伝』一〇～一八頁。
- (10) 上田家文書一六一・二二九。
- (11) 表題の下の注記や清和天皇・陽成天皇の傍記の省略などが一致する（『上田宜珍伝』附録一～七頁。）
- (12) 『熊本行日記』上田家文書六十八四。
- (13) 鈴木登編『肥後藩士上田久兵衛先生略伝並年譜』熊本地歴研究会、二〇一〇年、一五～四五頁。

- 一九二八年、附録一、八頁。
- (14) 『上田宜珍伝』二二二頁。
- (15) 鈴木登編『肥後藩士上田久兵衛先生略伝並年譜』附録四頁。
- (16) 上田家文書一六一―追三二上田政之進郷長、追三八上田又之丞、追三九上田英八。
- (17) 『三百藩家臣人名事典』七、新人物往来社、一九八九年、四四五頁。
- (18) 上田家文書一六一―追三七。
- (19) 上田家文書一六一―二三三「宜珍翁傳記資料」の「宜珍翁と渋江松石其他との往復書翰の写」中にある。
- (20) 上田家文書一六一―二三三。
- (21) 上田家文書二四五―一。
- (22) 吉沢英明「真田三代記」『世界大百科事典』平凡社、ジャパンナレッジ版。
- (23) 『日本国語大辞典』小学館、ジャパンナレッジ版。
- (24) 「藩翰譜」一二巻本、国立国会図書館四―二七八。
- (25) 順番に上田家文書一六一―三〇、一三三―一三五。
- (26) 『恵那市史 通史編』二、一九八九年、七九三頁。
- (27) 系譜には「二惟之」と二代目とある(『上田宜珍伝』附録三頁)。
- (28) 七二一「長国寺略縁起書」永禄二年、七二二「長国寺略縁起書」慶長二年(『恵那市史 史料編』一九七六年、一六四―一六九頁)。
- (29) 『恵那市史 通史編』二、一〇五―一〇五二頁。
- (30) 上田家文書一六一―三三二「宜珍翁傳記資料」。
- (31) 上野洋三「紀行『藤波の記』翻刻(下)』『日本文藝研究』五九卷三、四号、二〇〇八年、二八―二九頁。
- (32) 三一三参照、「滋野氏系図」「信州滋野氏三家系図」「断家譜」「信州祢津城主神平惟之家系図」の四系図。
- (33) 上野洋三「紀行『藤波の記』翻刻(上)』『日本文藝研究』五九卷二号、二〇〇七年、四〇頁。
- (34) 『岐蘇路記』、岐阜市立図書館GW/〇九/二五。
- (35) 伊東実臣「美濃明細記」一信社出版部、一九三二年、二九六頁。以下、地誌の解説は『日本歴史地名大系 岐阜県』平凡社、ジャパンナレッジ版参照。
- (36) 樋口好古『濃州徇行記』一信社出版部、一九三七年、一一三頁。
- (37) 樋口好古『濃州徇行記』一〇九頁。
- (38) 『恵那市史 通史編』二、一二〇五―一二〇八頁。
- (39) 秋里籬島著、西村中和画「木曾名所図会」早稲田大学図書館九曜文庫三〇E〇二〇六。
- (40) 『新撰美濃志』神谷道一、一九〇〇年、七一八―七一九頁。
- (41) 松平定信「集古十種」国立国会図書館和古書・漢籍二三四―三。
- (42) 恵那市文化財保護審議会編『恵那市の文化財 増補版』一九八七年、九―一〇頁。
- (43) 松木寛「木曾街道六十九次」『世界大百科事典』。
- (44) 『恵那市史 史料編』考古・文化財、一九八〇年、四四二―四四四頁。
- (45) 『恵那市史 史料編』四〇八―四一一、一一七四頁。

- (46) 上田家文書一六一―二三四。
- (47) 太田亮『姓氏家系辞書』磯部甲陽堂、一九二〇年。
- (48) 『日本歴史地名大系 岐阜県』。
- (49) なお犬引ノ孫は、小県郡編『小県郡史 正篇』小県時報局、一九二二年、二八九頁にも引用されるが、ここでの神平は根津宗光である。
- (50) 『恵那市史 恵那の昔ばなしとうた』一九七四年、四二二―四二七頁。
- (51) 上田家文書一六一―二三〇・二三四・二三五の袋。
- (52) 『上田宜珍伝』序文八―一〇頁。
- (53) 『日本人名大辞典』講談社、ジャパンナレッジ版、『二〇世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、二〇〇四年。
- (54) 加藤護一編『恵那郡史』恵那郡教育会、一九二六年、阿部栄之助序。
- (55) 加藤護一編『恵那郡史』緒言。
- (56) 加藤護一編『恵那郡史』九〇頁。
- (57) 上田家文書一六一―二三〇。
- (58) 上田家文書一六一―二三二・二三三。
- (59) 長野県立歴史館〇一六／二二二一―一五。
- (60) 上田家文書一六一―二三二。
- (61) 塙保己一編『続群書類従』七輯上系図部、卷一七四、一九二五年、一九七九年訂正三版、続群書類従完成会、四九七―五〇六頁。『続群書類従』は寛政七年（一七九五）―八年ごろ企画、享和三年（一八〇三）に目録提出とある（山本武夫「群書類従」『国史大辞典』吉川弘文館、ジャパンナレッジ版）。
- (62) 『断家譜』二、続群書類従完成会、一九六八年、五五―五七頁。
- (63) 『恵那市史 通史編』一、一九八三年、七八九―七九六頁。
- (64) 栃木孝惟他校注『保元物語 平治物語 承久記』新日本古典文学大系四三、岩波書店、一九九二年、四二、六八頁。
- (65) 松尾葦江校注『源平盛衰記』三弥井書店、二〇〇七年、九四頁。
- (66) 二本松泰子「中近世期における信州禰津氏の放鷹術…諏訪信仰との関わりをめぐって」『伝承文学研究』六四、二〇一五年、七六―九五頁。
- (67) 塙保己一編『続群書類従』七輯上系図部、四九七―五〇六頁。
- (68) 寺島隆史「近世大名になった禰津氏―中世末から近世初頭にかけての禰津氏の動静―」『千曲』四六、一九八五年。
- (69) 工藤寛正編『江戸時代全大名家事典』東京堂出版、二〇〇八年、七三八頁。
- (70) 二本松泰子「中近世期における信州禰津氏の放鷹術…諏訪信仰との関わりをめぐって」八八―八九頁。
- (71) 『上田宜珍伝』四頁。
- (72) 『上田宜珍伝』九頁。
- (73) 『上田宜珍伝』、八二頁。
- (74) 二〇一六年九月一七日、荒尾上田家墓地の現地調査による。
- (75) 東昇「地域情報の集成と知識の伝播―書籍による人のつながり―」二三五―二三七頁。